（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）: 理学部理学科　3年

氏 名: 延平友菜

授業科目名	グローバル実地研修【地域人材育成プラットフォームかごしまグローバル教育プログラムの実地体験】
研修先（大学・国・都市名）	西オーストラリア大学（オーストラリア・パース）
研修期間	令和　4年　8月　18日　～　令和　4年　9月25日

1. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（350字以上）

午前中は西オーストラリア大学英語教育センター（CELT）で英語の授業を受け、午後はパースを通して鹿児島の課題についての提言を行うべく、パースの現状を学ぶためのフィールドワークを行った。CELTではただ問題を解くだけではなく、教科書に沿った内容についてグループやペアでそれぞれの意見を話し合ったり、簡単なプレゼンを行ったりした。他大学の日本人留学生が多数来ておりクラス内もほとんどが日本人だったが、なるべく日本人以外の学生と同じグループになるようにした。そのおかげで苦手だったリスニング力とスピーキング力が伸びたのではないかと思う。実際に研修前のクラス分けテストではレベル4だったが、研修期間を通して受けたテストではレベル5のクラスに上がれるほどの結果を出せた。英語以外にも他国の学生と積極的に交流したことで、自分の視野が広がった。

2. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（350字以上）

現地でのホストファミリーとの生活を通して、受動的な態度ではなく、自分から行動することの大切さを学んだ。私のホームステイ先には3人の子どもがいたが、話すスピードが速く聞き取れなかったことに加え、私も遠慮がちな姿勢だったため、あまり会話することができなかった。そこでホストファミリーとなるべく多くの時間を過ごし、子どもたちの遊びやゲームに参加するようにした。何を言っているのか理解できなかったときは聞き直したり、スピードを落としてもらうように伝えた。そうした結果、心の距離が縮まり、子どもたちのほうから話しかけてもらえるようになった。それ以外にも何かを探しているときやわからないことがあったときにスーパーやショップの店員さんなどに声をかけてもらうのを待つのではなく、自分から質問しに行くことができるようになった。

3. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（350字以上）

研修前と後を比較して私の中で変化したことは、英語で会話することに対する抵抗感がなくなったことである。そのきっかけとなったのは携帯のトラブルだった。私は研修期間中、現地の通信会社のeSIMを利用する予定だった。しかしeSIMを契約するためのID認証がうまくいかず、通信会社のサポートデスクに問い合わせをしなければならなかった。辞書やインターネットで調べながらチャットのやりとりを行ったり、ホストマザーに相談したりして最終的に解決することができた。研修前は自分のリスニング力やスピーキング力に自信が持てず、英語で会話することをなるべく避けていた。以前短期でホームステイをした時もホストファミリーからの質問に一言だけで返したり、自分から話しかけることができなかった。しかし、今回到着後すぐにつたない英語でも会話することができたという経験をしたおかげで、その後の生活の中やCELTの授業において間違いを恐れずに英語で会話することができるようになった。

4. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（350字以上）

今後取り組んでいきたいことは2つある。一つはパースの動物園での取り組みを参考にして、固有種保全についての提言を行うことである。鹿児島県もパースも固有種が多く、その保全が課題となっている。私は十分な保全活動を行うためには、特に地域住民の理解が必要であると考える。今回パースで生活したり、現地の動物園などを訪問したりした中で、募金活動や現状を知ってもらうための活動が盛んであると感じた。そこで学んだことを活かして鹿児島での固有種の保全活動を広く周知し、その活動に参加してもらう方法を提案したいと考えている。もう一つは、鹿児島と海外の人たちとの架け橋になることだ。私は将来海外で生活したいと考えていて、そのためにこれからも積極的に国際交流を行える場に参加しようと考えている。その中で鹿児島について知ってもらい、一人でも多くの人に鹿児島に関心をもって訪れてもらえるようにすることが目標である。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）: 理学部理学科生物プログラム3年

氏 名: 佐々木けいと

授業科目名	グローバル実地研修【地域人材育成プラットフォームかごしまグローバル教育プログラムの実地体験】
研修先（大学・国・都市名）	西オーストラリア大学（オーストラリア・パース）
研修期間	令和　4年　8月　18日　～　令和　4年　9月25日

1. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（350字以上）

研修先では語学学校に通い、英語の語彙や文法、リスニング能力、グループの人との会話で、英語の四技能に対する改善があった。リスニングサークルと言う討論する話題をチームで決め、各自資料を作って持ち寄り、話し合うというアクティビティでは英語でアジア圏の他の価値観を持つ人の観点から意見を聞くことができたのが、より深く食文化一つを見てもそのバックにある考え方やそれを生む環境の違いに気づくことができた。クラスメイトもすべて別のアジアの国から来ていたので、休み時間などの会話も国際的な交流で文化の違いを学ぶことができた。また、オーストラリアの英語はオーストラリアアクセントがあることで有名だが、それだけではなく、アジア圏のそれぞれの学生が話す英語にも独特のアクセントがあることが発見できた。近代建築についての調査では調査地のツアーに参加し、自分のキャンパスも追加で調査に入れ、UWAの学生とホストマザーにインタビューをする中でより深く調査できたと感じた。昔ながらの建物を使っていることに全面的な好意を示す人もいれば、tourismのためであることに否定的な人もいた。さらに、鹿児島大学の他のメンバーの調査にも同行したことで、生物や農学に関する知識をお互いに交換しながら調査することができた。最後に、今回私を含める鹿児島大学生はCELTではなく、UWA本校にあるサークルに5週間参加したので、そこで現地の大学生と交流したことは、オーストラリアの大学生のリアルを知ることができたと考えている。

2. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（350字以上）

今回の生活面での気づきとして、まず今回の滞在はホームステイではあった。私のホストマザーはとても温和で受け入れてくれる方で、かつ日本に対する好感がある方だったので問題なく5週間過ごすことができたが、友達のホストファミリーなど、いくつかのホストファミリーはトラブルを抱えていると聞き、自分のホストファミリーではないが日本とオーストラリアで海外の学生をホストすることへの姿勢の違いを感じた。また、生活の中で違いとしてあるのは、オーストラリアではマスクが必要では無くなったことだ。オーストラリアもバスや電車ではマスクの着用が求められていたが、途中からそれもなくなり街中でマスクをする人を探すことが大変だった。もちろん日本との人口の違いがマスクの有無の主な差であると思う。しかし、マスクをしない人がメジャーであると言うことは国自体がオープンで明るい印象を抱いた。加えて、私はホームメイトと週末ミュージカルを観に行ったが、日本のミュージカルではまず演者が歌唱している最中に音を立てることはない、しかし今回見た劇で観客が音を立てて声を上げてリアクションしているのが文化の違いを強く感じた。私のホストマザーは私とホームメイトに7時30分までには帰ってくることと、門限を設けたが、理由を聞いて安全の観点であったことがわかり、安全性の違いも感じた。

3. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（350字以上）

私が今回の研修で実感を持って改善したと思うのはマイナス意見でも自分の主張を他人に言うことである。例えば、放課後のプランを決めるとき、食事の選択やさまざまな場面で人と行動する時には意思決定が必要である。この時に自己主張をするか否かで私は以前主張せず人に任せていた。また、ホームメイトとの連絡頻度でも違いがあり、安全の観点から相手に改善を求めたかった。以前の私であったならば相手の意見とは違うことを主張することはなかった。相手に合わせれば済むからである。しかし、パースに行きホストマザーや現地の友達が「あなたはどうしたい？」と言ったように意見を求めてくることが多かったので、段々と自分の意見を伝えることができるようになった。ホームメイトとの連絡頻度での違いも以前なら何も言わなかったが、今回は連絡頻度が少なすぎると心配してしまうので連絡をしてほしいとしっかり主張をし、ホームメイトと話し合うことができた。このように人に改善を求めたり、意見を主張し同意を求めることなどは少なかったので成長したと感じた。

4. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（350字以上）

今回の研修を通して近代建築を調べたが、日本とパースでは近代建築への認識が違うと思った。日本では古くて老朽化しており安全面として撤去されるものであり、パースでは伝統があり、丈夫で観光資源として活用できるものであった。日本では近代建築を今活用しようとすれば補修工事など初期費用かかるが、パースではフリーマントルプリズンのように収容所として閉鎖してから半年で観光資源として活用できる。この費用の差はやはり方針を変えると思った。追加で、私がパースの街で生活してバスや電車の優先席の作りが日本より優れていると感じた。このように、実際にパースに行って生活をしたことで、パースの優れているところを日本に導入したらどうなるだろうかと考えるようになった。今後、日本で働いていく中で、国同士の相互理解もだが、良いところを導入し合えるように地元に根付いた環境で働きたいと考えている。今後、海外で日本人が生活することをもう少し掘り下げたいので長期の留学に行きたいというのが直近の目標である。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　 殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）: 農学部3年

氏 名: 横山かりん

授業科目名	グローバル実地研修【地域人材育成プラットフォームかごしまグローバル教育プログラムの実地体験】
研修先（大学・国・都市名）	西オーストラリア大学（オーストラリア・パース）
研修期間	令和　4年　8月　18日　～　令和　4年　9月25日

１. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（350字以上）

研修先では、UWA（西オーストラリア大学）の附属の語学学校に通っていました。毎日8時半から13時まで授業があり、2時間の授業を2コマ、ネイティブの先生の元で受けていました。授業はすべて英語で行われ、教室は英語しか使ってはいけないというルールでした。学校自体は日本人が多かったのですが、そのような決まりだったので日本人同士でも英語で会話を行っていました。授業の内容としては、reading, speakig, listening, writingすべての技能を伸ばすためのカリキュラムでした。特にwritingとspeakingに関して先生が力を入れて授業を行ってくださったので、その二つが特に力がついたと感じています。具体的には、speakingは授業の最初に話すテーマが与えられてそれについてペアを組んで雑談するものなどがありました。授業の中でグループワークの機会がとても多かったので、それがとてもspeakingの練習になりました。また、ホームステイをしたので、ホストファミリー会話したり、ホストファミリー同士の会話を聞いてよく使っているフレーズを真似したりして、speaking、listeningの練習になったと思います。そして、授業の後半ではその4技能に関するテストが行われました。speakingテストはクラスの人の前で、3分間のスピーチを行うというものでした。speakingに関しては、話さないと向上しないので間違ってもいいから話そうという気持ちで積極的に話すことを心がけました。特にwritingテストは1タームの中で3回も行われ、短い制限時間の中で正しく書かなければならないので、早く正確に書くという力が以前よりついたと思います。

２. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（350字以上）

現地の生活を体験して得た気づきや学びはたくさんありますが、まずは相手の文化を積極的に知って尊重することの大切さです。なぜそう思ったかというと、オーストラリアに住んで日本と違う点、例えば食べ物の違い、人との距離感の違い、生活習慣や常識の違いなど沢山あります。特に私は、今回の留学で食べ物や生活様式の違いに戸惑ったことがあります。オーストラリアは基本的に白米などは食べずにハードパンなどが多く、オーストラリアでの生活が中盤くらいになると、それがきつく感じることもありました。私のホストファミリーは日本への理解がとてもあり、日本食もとても好きな家庭だったので、日本のカレーライスを作ってくれました。また、これは日本語で何て言うの？と聞いてくれることも多かったです。そのような積極的に知ろうとしてくれる姿勢がとても嬉しく、さらに仲良くなることができ、相手の文化を尊重することの重要さを身を持って体験できたと感じています。日本で外国人と接したり、交流するときは、相手の国の文化を積極的に聞いて理解し、尊重しようと思いました。

３. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（350字以上）

研修前と研修後で自分が変化したと思うことは、「失敗してもいいからやってみよう」と以前よりも思うようになったことと、積極性がより出てきたことです。日本にいるときは、やりたいことがあっても時間がないからやっぱりやめようなどと諦めることもありました。しかし、一か月しか滞在できないオーストラリアでは、最後に充実していたと思えるような現地での生活を送りたい、英語の能力をあげたい、オーストラリアの友達を作りたいという目的を持って参加しました。その目的を持っていたのもあり、オーストラリアでは、自分一人で公共交通機関を使って街を回ったり、イベントやUWAの現地の学生との食事会などに参加して、たくさんの人と会ってコミュニケーションを取って仲良くなったりと、失敗を恐れずに少しでも気になったことがあればトライしました。最初の食事会では、早い英語の会話に圧倒されましたが、何回か参加しているうちに慣れてきてコミュニケーションを取ることができ仲良くなることができました。また、自分で現地のUWAの学生と日本人の留学生の10名ほどに声をかけて、一日かけてスワンバレーというワイナリーなどがある観光農園に行くことになりました。計画を立てるのは大変でしたが、いい思い出になり現地の学生と交流できるいい機会になったので、提案してよかったと思いました。それができたのも、オーストラリアの現地の友達がとてもフレンドリーで、また学生が積極的にイベントを提案して、やってみたいことをすぐやってみるというフットワークの軽さを目にしたからだと思います。その姿勢にとても刺激を受け、失敗してもいいからやってみようという気持ちになったと感じています。

４. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（350字以上）

地域社会の発展に寄与するために今後取り組んでいきたいことは、まず、オーストラリアの友達が日本や鹿児島に来た時にガイドして案内して、鹿児島の良さを知ってもらうということです。現地の友達と、日本のどこに行きたい？という話をすることがありましたが京都や東京と答える人が圧倒的に多く、日本というとその二つのイメージが強いなと感じました。私が、「鹿児島や九州は食べ物やお酒がとてもおいしいし、温泉や自然がたくさんあって、鹿児島には火山もあってとてもいいところだよ」といった紹介をするととても興味を持ってくれて、「日本に行くときは鹿児島に行くね！」と言ってくれたので、実際に鹿児島に来てくれたらたくさん案内をして、鹿児島や九州という土地を好きになってくれたら、それが地域社会の発展にもつながるのではないかと思いました。次に、日本語を勉強している現地の学生と交流することがあり、そういったときに簡単な日本語を話すことを心がけていました。その経験から、日本語を勉強している外国人に伝わりやすいやさしい日本語について興味が持ちました。今後、英語をもっと勉強して英語でコミュニケーションをより円滑にとることができるようになることも目標ですが、やさしい日本語を勉強して使えるようになることも目標です。鹿児島にきた外国人と交流したときにやさしく分かやすい日本語で話すということができたら、とてもよいのではないかと思いました。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）: 農学部国際食料資源学特別コース・3年

氏 名: 谷口　彩乃

授業科目名	グローバル実地研修【地域人材育成プラットフォームかごしまグローバル教育プログラムの実地体験】
研修先（大学・国・都市名）	西オーストラリア大学（オーストラリア・パース）
研修期間	令和　4年　8月　18日　～　令和　4年　9月25日

1. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（350字以上）

ホストファミリーとの生活を通して、パースのことやオーストラリアのことについて学んだ。学校では、日常で重要な表現や、文法を学んだ。放課後の活動としてJSSという日本語を勉強している現地の学生と関わる機会があった。日本語が非常に上手な人が多くいた。留学を経験していないのにもかかわらず日本語の習得ができている。学校で英語を長く学んできたが私はそれほど英語を流暢に話すことはできない。また、調査のためにオーガニックスーパーマーケットと、ファーマーズマーケットと、ヤギミルクの農家さんを訪問した。そこで、環境問題に対する考えや、環境に負荷をかけないような生産方法を実際行っている人たちの話を聞いた。大量生産を行わずにハンドメイドでバターを作っている人や、純粋なはちみつを作っている人などファーマーズマーケットには環境にやさしいものを生産している人達が多くいた。また、現地の動物園に行き、西オーストラリア固有の動物を見た。実際に触れることもできた。

2. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（350字以上）

お店に行った際、店員さんと、お客さんとの接し方が対等であるということが衝撃だった。おすすめのものを聞きたいときも、自信満々にこれがいいと言ってくれるのは、買う際にも自信をもって買うことができる。また、ほしい商品がその店にない場合は、近くにある別の店を紹介されたときは非常に驚いた。また、ホストマザーがオーストラリア英語を話すのでオーストラリア英語の特徴を少し知ることができた。また、私たちは学校でアメリカ英語を学んできたので文字のつづりの違いや発音の仕方の違いをオーストラリアで何度も経験した。ホストファミリーと生活するというのはいろいろ思うことがあった。優しいひとではあるがファミリーを選ぶことはできないので実際に気が会わない人でもうまくやっていかないといけないということが分かった。ホストファミリーも人間なのでいらいらすることがあってもうまく対応していかないといけないと感じた。

3. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（350字以上）

私はSIMカードの登録と、電車やバスのパスカードで問題が生じた。SIMが一向にアクティブ化できず、同じ大学から行った友達はホストファミリーに電話をかけてもらったらすぐ解決したと言っていたので電話をする手段がなかったのでホストファミリーに電話をお願いすると電話してもらえなかったので日本のSIMの国際電話を使ってSIMの会社に連絡をした。また、パスカードが勝手に大人料金になっているという問題が生じたので大人料金の期間多く払った分を返金してもらえないかという事を言うためにパスカードの会社に電話をした。電話は直接話すよりもはっきり声が聞こえないので聞き取ることが大変だった。また、現地の人はひとつの文章が非常に長いので途中から何の話をしているか分からなくなってしまった。自分であっているか英語で確認しながら何とか2つとも自力で解決することができた。自分で電話をして英語で頑張って現状を伝えて相手の言うことを理解する。その経験は度胸になったし、文法が間違っていてもしっかりと言いたいことが伝わるということも分かった。

4. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（350字以上）

今回の留学を通して私は海外が好きであるということを再確認することができた。コロナで2年間海外と関わることがあまりできなかったので忘れかけていた。私はヤギやヒツジのミルクなどのマイナーな乳製品に興味がある。これらの乳製品は海外では多く食べられているのでトビタテ留学JAPANに応募してヨーロッパの農家さんを訪問して実際のミルクの生産方法などを知りたいと考えている。私は高校生のとき1年間ドイツでホームステイをした。ドイツは工業大国でありながら環境問題に関心のある人が多く、実際に環境に良い生活をしているという印象であったので、また、ドイツに行き農家さんと生活してきたいと考えている。また、少し忘れてきたドイツ語を勉強しなおして、12月のドイツ語検定を受験しようと考えている。また、オーストラリア研修を通して自分の英語力を知りたいと思ったので10月のTOEICテストを受験する予定である。鹿児島の離島ではヤギ肉が食べられていたり、ヤギミルクの生産が行われているので海外から何かを持って帰ることができれば鹿児島に貢献することができると考える。